

# プロセスレコードによる学生の学び ～対人関係間の相互作用に関する記述から～

河合 規仁・橋本 美香

**研究目的** プロセスレコードによる対人関係間の相互作用についての学生の学びを明らかにすることを目的に自記式質問紙調査を行った。

**研究方法** 介護福祉士養成課程の短期大学1年生95人および小学校教諭・保育士等資格取得を目指す大学1年生4人（以下、「学生」という）の計99人のうち、研究協力の得られた82人（回収率82.8%）を対象とし、プロセスレコードを活用した授業後に、プロセスレコードによる学びの内容について調査した。

**結果** ①学生は、「同場面に遭遇した時の対処理解」「対象の多面的理解」「相手の反応を客観的に理解」「自分の反応を客観的に理解」「情報収集の必要性」について理解できたと考えていた、②プロセスレコードを記述することによって、学生は自分の行動傾向についての気づきが得られた、③具体的記述ができた学生の方が、できなかった学生より対象の多面的理解ができたと考えていた（ $p < .05$ ）、④同場面に遭遇した時の対処理解ができた学生の方が、対処理解ができなかったと答えた学生より今後プロセスレコードを活用したいと考えていた（ $p < .05$ ）、という結果が得られた。

**考察** プロセスレコードは学生の自己洞察を促す有効な教材となりうること、また、教材としてプロセスレコードを活用するときには、具体的にかつ詳細に書くことがより学生の理解を深めることが明らかになった。教員は、対峙する学生観にあった教材開発や活用が重要であることが示唆された。

キーワード：プロセスレコード 対人関係 コミュニケーション 自己理解

## I はじめに

### 1. 研究目的

コミュニケーションという語は、ラテン語の「communicare（伝える、分かち合う、共有する）」からできており、情報の処理や伝達のプロセスであり、思想や態度を共有しようとする試みである<sup>1)</sup>。対人援助において、コミュニケーションの役割は大変重要であることは言うまでもない。しかしながら、電子的コミュニケーションの普及や、少子化、核家族化、価値観の多様性等により、直接的接触によるコミュニケーショ

ン能力を苦手とする若者が少なくない。

長家の研究<sup>2)</sup>では、看護学生はコミュニケーションに自信を持っていながらも、コミュニケーションの阻害要因を自分自身ではなく相手側にあるとする傾向があることが明らかになっていた。

そこで今回、学生の対人関係のコミュニケーションにおける自己洞察を深める目的でプロセスレコードを活用した授業展開を行った。

プロセスレコード (process record) は、ヒルデガード E.ペプロウによって提唱された患者の言動、看護師の言動・考察を時系列に記録したものである。ペプロウの看護理論は看護場面での患者と看護師間の相互作用を主題としている<sup>3)</sup>。

対人援助職を目指す学生が、自ら行動を振り返ったり、また自分の行動の傾向を知ることが、コミュニケーションスキルの向上や、対人関係における自己洞察を深めることにおいて有効であると考えた。授業展開後、学生の学びの成果を知るために自記式質問紙調査を行った。

本研究の目的は、プロセスレコードによる対人関係間の相互作用についての学生の学びを明らかにすることである。

## 2. プロセスレコードによる授業展開方法

プロセスレコードを使用した授業は「認知症の理解」の科目であり、平成22年11月に1回目および12月に2回目の合計2コマ180分間を行った。

1回目の授業では、最初にコミュニケーション技術の向上のためにプロセスレコードを活用した授業を行うこと、プロセスレコードの記載方法について説明した。記載方法は以下の順序で行った。模擬事例を記載したプロセスレコードを提示し、1)「相手の情報」と「場面の状況」を記載する、2)「相手の言動」と「自分の言動」およびその関わりの中で「自分が思ったこと」を時系列順に各枠内に記載する、3)「相手の言動」「自分の言動」「自分が思ったこと」の横のラインをそろえ各文頭に「No」をつける、4)「考察」の部分には、相手の言動や表情から読み取れる思い、自分の行動を客観的に分析して得られた考え等を「No」を示して記載する、と説明した。次に、提示した模擬事例を参考に、これまでの対人関係において強く印象に残っている場面を書くよう指示した。また、選択した場面は、関わりがうまくいった場面でもうまくいかなかった場面でも良いこと、認知症のある高齢者や子どもとの関わりがあればその場面を、なければ友人や家族との関わり場面でも良いことを伝えた。

学生が提出したプロセスレコードで再構成した場面は、「高齢者との関わり場面」86事例、「子どもとの関わり場面」1事例、「家族との関わり場面」3事例、「友人との関わり場面」3事例、「アルバイトでの客対応場面」1事例、未提出者5人だった。1事例を除くすべてがうまくいかなかった事例だった。それぞれのプロセスレコードに対して教員がコメントを加えた上で、2回目の授業で学生に返却した。

2回目の授業でグループワークを行った。4人1グループとし、各グループ内で自分のプロセスレコードを発表したうえで、グループで1事例を選択し、よりよい場面展開にするための考察を深めること、その考察を基に、相手への関わり方を検討することを指示した。その後、最初の関わり場面、考察、検討を加えた関わり場面をグループ毎に全員の前で演じ発表した。

## II 研究方法

### 1. 研究対象

学生99人に対して、自記式質問紙調査を依頼し協力の得られた82人（回収率82.8%）を研究対象とした。調査は、平成22年12月、2回目のプロセスレコードによる授業終了後に行った。

### 2. 調査内容

- 1) 設問1「プロセスレコードを書いた経験はありますか」として、経験の有無について単一回答とした。
- 2) 設問2「プロセスレコードによる場面の再構成としてその場面を選んだ理由」として、学生が印象に残っている場面として認識している記憶は、つまりきや困難等の強い精神活動が発生したためではないかと予測し、①「予測した場面展開にならなかったため」、②「相手の訴えを傾聴できているか分析するため」、③「自分の行動の傾向を知るため」、④「相手の思いを理解できなかったため」、⑤「相手と深く向き合いたいため」、⑥「自分の対応が悪かったと反省しているため」、⑦「同じ失敗を繰り返さないため」、⑧「その他」の8項目を設定し、複数回答とした。
- 3) 設問3「プロセスレコードに取り上げた場面における相手との関わり方」として、①「目的意識を持って関わった」、②「相手の思いを理解しようと思って関わった」、③「積極的に関わった」、④「相手に興味を持って関わった」の4項目を設定し、それぞれの設問に対し、できた・まあまあできた・あまりできなかった・できなかった、の4件法単一回答とした。学生の関わり方の態度について把握するためであると同時に、学生が自己の態度を振り返る機会を与えるという教育的な意味づけでもある。
- 4) 設問4「プロセスレコードを書いたことによる学び」として、プロセスレコードによる学びの内容を把握することが今後の教材活用の一助となると考え、①「相手について情報を収集する必要性が理解できましたか」（情報収集の必要性）、②「自分の反応を客観的に考察することができましたか」（自分の反応の客観的な理解）、③「相手の反応を客観的に考察することができましたか」（相手の反応の客観的な理解）、④「さまざまな視点で相手を理解することができましたか」（対象の多面的理解）、⑤「同じ場面に遭遇したときの対処が理解できましたか」（同場面に遭遇した時の対処理解）、についてそれぞれ、できた・まあまあできた・あまりできなかった・できなかった、の4件法単一回答とした。
- 5) 設問5「プロセスレコードを具体的に記述できたか」として、そう思う・まあまあ思う・あまり思わない・そう思わない、の4件法単一回答とした。
- 6) 設問6「プロセスレコードを今後も活用したいと思うか」として、そう思う・まあまあ思う・あまり思わない・そう思わない、の4件法単一回答とした。
- 7) 設問7「プロセスレコードを活用した授業を終えての感想や意見をお書きください」として、自由記述欄を設けた。

### 3. 分析方法

設問1「プロセスレコードを書いた経験の有無」、設問2「プロセスレコードによる場面の再構成としてその場面を選んだ理由」、設問3「プロセスレコードに取り上げた場面における相手との関わり方」、設問4「プロセスレコードを書いたことによる学び」については、単純集計を行った。さらに、設問5「プロセスレコードの具体的記述ができたか」及び、設問6「プロセスレコードを今後も活用したいと思うか」について、 $\chi^2$ 検定を行い分析した。設問7の自由記述は、記述内容の種類によって分類した。

統計解析は、SPSS11.0 for windows 統計ソフトパッケージを使用した。

### 4. 倫理的配慮

自記式質問紙調査は今後の学生指導の一助を得るための協力依頼であり、質問紙は無記名自記式で個人が特定されず、調査協力の有無は成績には影響しないことを説明した。

## III 結果

### 1) プロセスレコードを書いた経験の有無 (図1)

プロセスレコードを書いた経験の有無について、図1に示した。  
学生の39.0%が書いた経験があった。

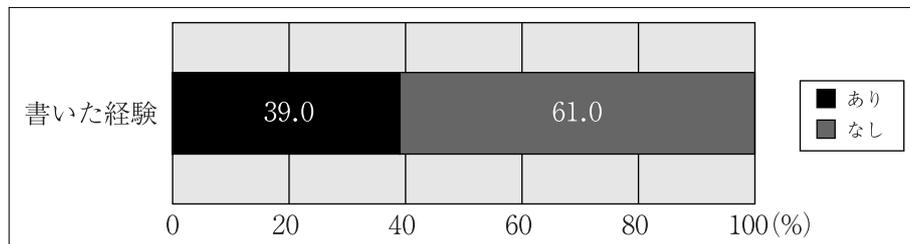


図1 プロセスレコードを書いた経験の有無

### 2) プロセスレコードによる場面の再構成としてその場面を選んだ理由 (複数回答) (図2)

場面の再構成としてなぜその場面を選んだ理由について図2に示した。

最も多かった理由は、「同じ失敗を繰り返さないため」52.4%で、次が「自分の対応が悪かったと反省しているため」50.0%だった。

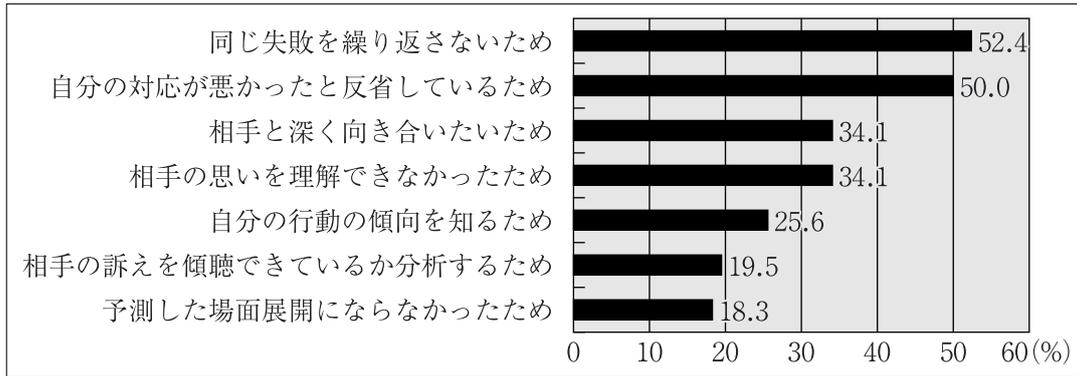


図2 プロセスレコードによる場面の再構成としてその場面を選んだ理由(複数回答)

3) プロセスレコードに取り上げた場面における相手との関わり方 (図3)

プロセスレコードに取り上げた場面における相手との関わり方について図3に示した。

「相手に興味を持って関わった」については、できた・まあまあできたと考えている学生が82.9%、「積極的に関わった」については、できた・まあまあできたと考えている学生が90.2%、「相手の思いを理解しようと思って関わった」については、できた・まあまあできたと考えている学生が85.3%、「目的意識を持って関わった」については、できた・まあまあできたと考えている学生が81.8%だった。

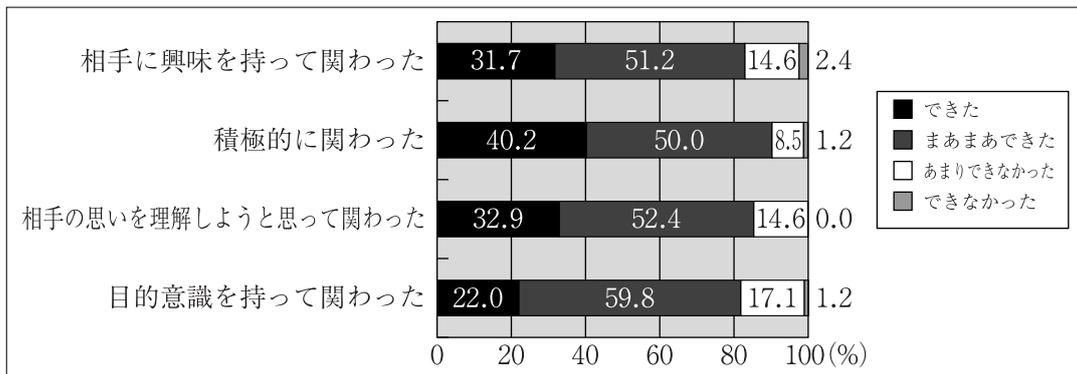


図3 プロセスレコードに取り上げた場面における相手との関わり方

4) プロセスレコードを書いたことによる学び (図4・図5・表1)

プロセスレコードを書いたことによる学びについて、図4・図5・表1に示した。

「同場面に遭遇した時の対処理解」については、できた・まあまあできたと考えている学生が91.4%、「対象の多面的理解」については、できた・まあまあできたと考えている学生が79.2%、「相手の反応の客観的な理解」については、できた・まあまあできたと考えている学生が85.4%、「自分の反応の客観的な理解」については、できた・まあまあできたと考えている学生が85.3%、「情報収集の必要性」については、できた・まあまあできたと考えている学生が95.1%だった。

5) プロセスレコードを具体的に記述できたかについては、そう思う・まあまあ思うと答えた学生が67.1%だった。

6) 今後も活用したいかについては、そう思う・まあまあ思うと答えた学生が92.6%だった。

7) プロセスレコードについての自由記載については、記載総数33件中、自分の行動傾向についての気づきが25件あり、「いろいろな視点から考察できず、一つのことに集中してしまう」「相手に対して馴れ馴れし過ぎ、もっと謙虚になりたい」などの記載が見られた。プロセスレコードについての学びについては8件あり、「プロセスレコードを書いて思い起こすことによって、振り返ることができ分析できる。相手の気持ちや相手への対応の仕方をより深く理解することができるようになったと感じた」などの記載が見られた。

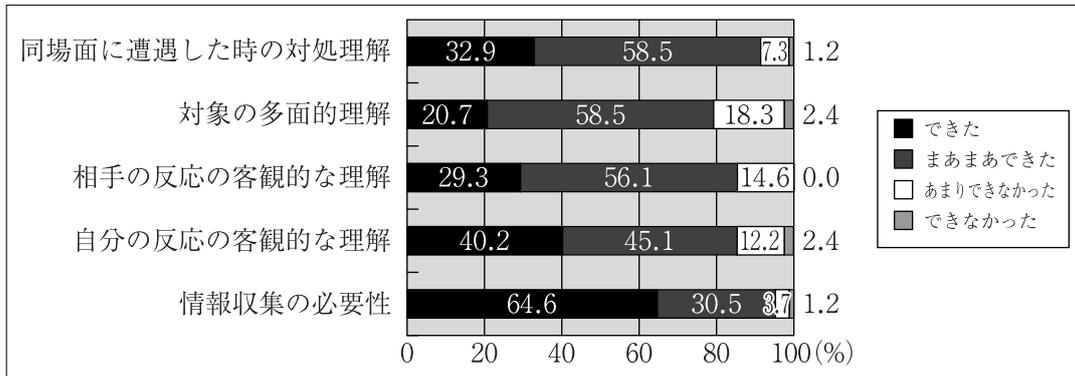


図4 プロセスレコードを書いたことによる学び

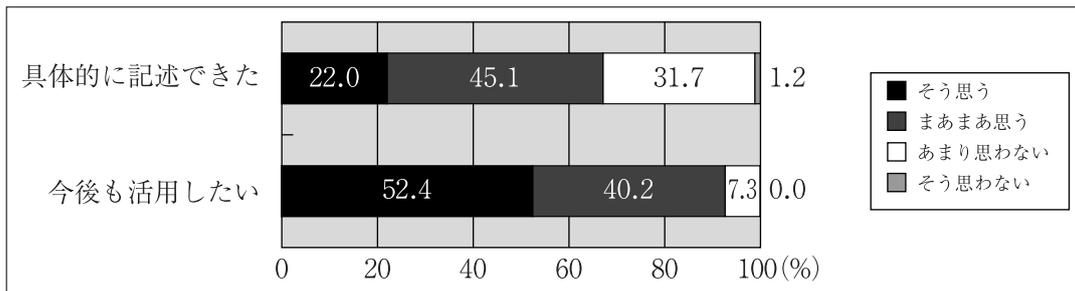


図5 プロセスレコードの具体的記述および今後の活用

表1 自由記載

自分の行動の傾向についての気づき (25件)
回答例
・いろいろな視点から考察できず、一つのことに集中してしまう
・相手に対して馴れ馴れし過ぎ、もっと謙虚になりたい
・自分のことで精一杯になると、相手の思いを深く考えられなくなるときがある
・怒られてしまった相手を避けてしまう
・人に合わせたり、時々自分勝手な行動をするときがあると思う
プロセスレコードによる学び (8件)
回答例
・プロセスレコードを書いて思い起こすことによって、振り返ることができ分析できる相手の気持ちや相手への対応の仕方をより深く理解することができるようになったと感じた
・その場だけでの対応ではなく、生活歴、性格を理解することがより深く関わることにつながると思った
・相手が分かるように説明することが大切だと思った
・なぜそんな言葉を言ったのか、なぜそんな行動をしたのかなど、原点を探るとわかることが多いと思った
・もう一歩進めなかったが、しかし「どうしてなのか」という考察をすれば行動できると思う

8) プロセスレコードの具体的記述ができたかどうか別対象の多面的理解（表2）

プロセスレコードの具体的記述ができたかどうか別に、学びの内容について $\chi^2$ 検定を行った。対象の多面的理解について有意差が得られたので表2に示した。

具体的記述ができた学生のうち対象の多面的理解ができたと答えた者は85.5%で、具体的記述ができなかったと答えた学生の66.7%より有意に高かった（ $p < .05$ ）。

表2 具体的記述ができたかどうか別対象の多面的理解（%） n=82

項目	多面的理解ができた	多面的理解ができなかった	検定
具体的記述ができた	88.5	14.5	*
具体的記述ができなかった	66.7	33.3	

$\chi^2$ 検定：\*  $p < .05$

9) 同場面に遭遇した時の対処理解別、今後のプロセスレコードの活用（表3）

学びの内容によって、今後プロセスレコードを活用したいかについて $\chi^2$ 検定を行った。同場面に遭遇した時の対処理解について有意差が得られたので表3に示した。

同場面に遭遇した時の対処理解ができた学生のうち、今後プロセスレコードを活用したいと答えた者は94.7%で、対処理解ができなかったと答えた学生の71.4%より有意に高かった（ $p < .05$ ）。

表3 同場面に遭遇した時の対処理解別今後のプロセスレコードの活用（%） n=82

項目	活用したいと思う	活用したいと思わない	検定
対処理解できた	94.7	5.3	*
対処理解できなかった	71.4	28.6	

$\chi^2$ 検定：\*  $p < .05$

## IV 考察

### 1. プロセスレコード内容の分析

学生がプロセスレコードで再構成した場面では、学生は相手に興味を持ち積極的に関わろうとする思いがあった。しかし関わりはうまくいかなかったことが強く印象に残り、自分の対応が悪かったと認識していた。さらに同じ失敗を繰り返したくない、次に同じ場面に遭遇したらうまく対処したいと考えていた。

大池らの看護学生を対象にした研究<sup>4)</sup>では、つまずき場面のプロセスレコード内容で多かった特徴として「病気・生活・死生観などに関する話題」「学生自身の言動を中心としたつまずき」等をあげていた。学生は深刻な話題でなにを言うべきかという迷いを感じ、そこで重要になってくるのが教員の事後指導であるとしていた。今回の結果からも、うまくいかなかった関わりに対する学生の戸惑いや迷いの気持ちがうかがえた。そこで、プロセスレコードを活用することによって、学生自身の自己洞察

に留まらず、教員側にとっても学生のコミュニケーション場面を具体的に把握する機会を得ることになり、学生の体験的学びや教育指導のあり方へつなげていく教材となりうると考える。

自由記述結果からは、自分自身の行動傾向として、「馴れ馴れしすぎる」や、「怒られた相手を避ける」等、自ら気づきを得ていた。これは、対人援助としての職業人を形成するための自己成長に結び付けられやすいのではないかと考える。

## 2. プロセスレコードの有意義な活用

今回の結果では、プロセスレコードを具体的に記述した人の方が対象を多面的に理解できたと感じていた。このことから教材としてプロセスレコードを活用するときには、具体的にかつ詳細に書くことがより理解を深めることにつながると考える。緒方の研究<sup>5)</sup>からは、「他の人が読んででもその情景が浮かぶように書いた」という点や「指導者が見るものではあるが、自分の気持ちを素直に書いた」という意見はグループワークやスーパービジョンに役立つことが明らかになっていた。

そこでプロセスレコードを有意義に活用するためには、学生に対し実習前のプロセスレコードの書き方や活用のしかたについての導入指導が必要であるとともに、実習後は時間経過を待たずにプロセスレコードを活用した授業を展開したほうがより具体的かつ詳細な記載が可能になると言えるだろう。

今回、「認知症の理解」の科目においてプロセスレコードを活用した授業を展開した理由として、年齢格差や生活背景の違いによるコミュニケーションの困難さに着眼したためである。たとえば高齢者には、若者の知らない歴史的背景を生きてきた個々の価値観がある。さらに認知症を患った場合は、認知機能障害による意思疎通の難しさからコミュニケーションの取り方に学生は戸惑うことが多い。また、小児の場合は、成人には見られない成長過程として特徴的な心理と行動を持ち、また言語能力の発達過程にある対象であることから、小児にかかわる職業人は、教育的な役割を担う責務がある。ペプロウは、援助者には、対象をあるがままに受け入れる未知の人の役割、情報提供者としての役割、教育的役割、リーダーシップ的役割、代理人の役割、カウンセラーの役割などを担うことを期待されていると述べている<sup>6)</sup>。状況を観察し、対象者を理解することによって場面や対象に必要な支援の必要性がある。

また、それぞれの領域の専門職となるべき学生はこれらの知識を習得し、自己を 수용するとともに客観視し、自ら成長できる資質が必要であると考え。さらに、学生を指導していく立場にある教員は、対峙する学生観にあった教材開発や活用に取り組んでいくことが求められていると考える。

## V 結論

プロセスレコードを活用した授業展開によって、学生は以下の学びを得ていた。

- ① 学生は、「同場面に遭遇した時の対処理解」、「対象の多面的理解」、「相手の反応の客観的な理解」、「自分の反応の客観的な理解」、「情報収集の必要性」について理解できたと考えていた。
- ② プロセスレコードを記述することによって、学生は自分の行動傾向についての気

づきが得られた。

- ③ 具体的記述ができた学生の方が、できなかつた学生より対象の多面的理解ができたと考えていた ( $p < .05$ )。
- ④ 同場面に遭遇した時の対処理解ができた学生の方が、対処理解ができなかつたと答えた学生より、今後プロセスレコードを活用したいと考えていた ( $p < .05$ )。

## 文献)

- 1) 池田優子：看護におけるコミュニケーションの課題「落とし穴はどこにあるか」, 臨床看護第34巻12号, 1667-1683, 2008.
- 2) 長家智子：看護学生のコミュニケーションに関する研究—生活体験と集団行動体験とコミュニケーション能力との関係に焦点を当てて—, 九州大学医学部保健学科紀要第1号, 71-82, 2003.
- 3) 窪田恵子：ペプロウの看護理論, 事例でわかる看護理論を看護課程に生かす本第4章, 株式会社照林社, 108-127, 2010.
- 4) 大池美也子, 鬼村和子, 村田節子：初回基礎看護実習におけるプロセスレコードの分析～コミュニケーションのつまづき場面に焦点をあてて～, 九州大学医療技術短期大学部紀要, 第27号, 9-14, 2000.
- 5) 緒方まゆみ：プロセスレコードの有用性についての一考察～自己覚知とコミュニケーション技術のために～精華女子短期大学紀要, 85-90, 2008.
- 6) 前掲書3)
- 7) 吉田哲：プロセスレコードを通して学ぶ臨地実習ケーススタディ 学ぶ側と教える側の看護ダイナミクス, 看護の科学社, 2006.
- 8) 山本千昭：保育実習（施設）におけるプロセスレコードの活用～精神力動的な看護の視点を導入して～, 大阪樟蔭女子大学紀要 8, 233-243, 2009.
- 9) 榊崎美奈子, 大池美也子：小児看護学実習における看護学生と小児の関わり～プロセスレコードの内容分析から～, 九州大学医療技術短期大学部紀要, 第28号, 69-74, 2001.